

[原著論文]

学習者の学習動機に対応した基礎段階における日本語教授法について
—中国・内蒙古大学の日本語専攻学習者を対象にして—

于 衛紅¹⁾，包 賀喜格図¹⁾，奥田 俊博²⁾

Speculation of the Japanese Teaching Method Based on the
Learning Motivation of the Learners
—Taking the Students of the Japanese Department of Inner
Mongolia University, China as an Example—

Wei Hong YU¹⁾，Hexigetü BAO¹⁾，Toshihiro OKUDA²⁾

Abstract

This paper conducts a questionnaire with fifty-three students of Grade Three of the Foreign Languages Colleges of Inner Mongolia University (who have studied Japanese for two years) as subjects. Through the analysis of the data, the relationship between the learning motivation and the learning effect of Japanese can be made clear. In addition, the problems existing in the curriculum of undergraduates of the Japanese Department of Inner Mongolia University and the teaching methods of Japanese are explored. The findings of the analysis indicate that most of the students in the Japanese Department of Inner Mongolia University have integrated learning motivations while a relatively large proportion of the Japanese learners have unclear learning motivations or have no learning motivation at all. Being a comprehensive university which has consistently attached importance to the training of international talents by cooperating and communicating with foreign universities, Inner Mongolia University should actively reform on the curriculum and teaching methods which have problems. Meanwhile, the students can be divided into different groups according to their learning motivations, such as working in business, going abroad to study, or making further study as postgraduates, etc. Different contents should be designed for the learners who have different learning motivations. The exchange of teachers with Japanese universities and colleges should be tried and the joint teaching model should be developed in order to explore an entirely new teaching mode matching with the education of foreign universities.

KEYWORDS : Learning motivation, learning effect, elementary stage, education of Japanese, teaching method, speculation

1) 内蒙古大学外国語学院

2) 九州共立大学

1) Foreign Languages College of Inner Mongolia University

2) Kyushu Kyoritsu University

1. はじめに

本研究は、日本語を専攻する学習者の学習動機と学習効果との関係を明らかにし、学習者の習熟度に対応した基礎日本語教授法を考察することを目的とする。

先行研究を踏まえ、14項目からなる中国内蒙古大学の基礎段階における基礎日本語教育の実態調査表を作成し、内蒙古大学で日本語を専攻する3年生54名に無記名でアンケート調査を行った。その調査結果を考慮しつつ、基礎日本語教育のうち、文法、語彙、表記、作文、日本文化の各科目の教授法及びその問題点について検討を行い、日本語学習動機と学習効果との関係を勘案しながら、より効果的な基礎日本語教授法を追究し、就職先に応える基本教養の養成と留学先の大学での日本語教育と円滑に接続する可能な日本語教育の教授法を提唱するものである。

2. 問題の所在と先行研究

日本国際交流基金が2010年に発表した調査（2009年海外日本語教育機関調査結果）によると、中国の日本語学習者数は約83万人である。日本語を専攻とする学習者数は年々増加傾向にあるが、全体的に研究志向よりも実務志向（ビジネス、観光等）が強く、卒業後は日系企業に就職する者が多い。また近年では日本語運用能力のみでは就職が困難になってきており、英語、経営学、コンピュータ等の情報処理などを併せて学ぶ学生が増えている。一方、中国の教育機関においては、2つの学位を取得できるダブルメジャー制の導入や、日本の大学と提携し、日中双方の学位を取得できる2+2制度と2+3制度などを打ち出す機関も増えてきている。また、日本語専攻を卒業して日本の大学院の修士課程に進学し、言語専門以外の学科を専攻する学生も少なくない。

内蒙古大学においても、日本語専攻生に対してダブルメジャー制、2+2制度、2+3制度が導入されている。内蒙古大学では、毎年20人以上の学生を日本の各大学に派遣して、日本の大学教育を受けさせている。しかしながら、提携校の関係者と留学生への調査によると、内蒙古大学の留学生は中国国内の大学で習った知識を外国でうまく生かせない者もいる。つまり、中国国内の日本語教育は留学先の日本の大学の日本語教育と円滑に接続できないという現状がある。また、日本に留学しないまま大学を卒業し、日系企業に就職する学生も、同様の困難が生じている場合もある。大学在籍中の2年間あるいは4年間にわたって修得した知識を、現実の生活に役立て

ることができないことはたいへん残念なことである。その理由として、日本語学習者のニーズに対応した日本語指導の内容の不備や学習者の自律的な学習能力の欠如なども挙げられるが、それとともに、日本語学習者に対する学習動機の把握や学習動機を持続させるための日本語教授法の開発が充分に行われていないことも原因ではないかと思案される。

日本語習得効果に影響を与える個人差等の諸要因のうち、学習動機づけは「教育者が直面する最も複雑で、最も対応を迫られる課題」（Scheidecker & Freeman, 1999）だと言われている。学習動機づけについての研究成果は1970年代から数多く発表された。それらの中で最も有力的な考察の1つとして、Gardner & Lambert (1959, 1972) の研究成果が挙げられる。Gardner & Lambert (1959, 1972) は社会心理学的な観点から動機づけを捉え、動機づけを統合的動機づけと道具的動機づけに区分した。学習者が目標言語話者の文化や言語、その言語共同体社会について知りたい、最終的に自分もその共同体の一員になりたいという動機づけは「統合的動機づけ」である。これに対して、外国語の学習を通じてただ仕事に役立てたい、自分自身の社会的地位を高めたいなど、ある目的を達する一種の手段として使う動機づけは、「道具的動機づけ」である。これらの考察もその後の言語学習動機づけの研究の基礎的な土台になった。Oxford and Shearin (1994) はGardnerらの伝統的な分類法を踏まえ「エリート主義」を重要な動機づけの1つとして加え、難しい言語を学習することは一種のエリート主義の自己満足と見られると指摘した。

日本語学習者の学習動機づけに関する研究には倉八順子(1992)、高岸雅子(2000)、縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩(1995)、成田高宏(1998)、根本愛子(2009)、郭俊海・大北葉子(2001)、郭俊海・全京姫(2006)などが挙げられる。その中で、郭俊海・全京姫(2006)は、中国ハルビン理工大学外国語学部日本語科の大学生を対象として、統合的動機づけ、道具的動機づけのほかにエリート主義の影響もあるという調査結果をまとめている。この調査結果は、郭俊海・大北葉子(2001)のシンガポール学生に対する調査結果と類似しており、たいへん興味深い。

3. 調査の概要

本稿は、中国内蒙古大学外国語学院日本語学科に在籍している54名の2年生を対象としての基礎段階にお

ける基礎日本語教育の実態調査表を作成し、無記名でアンケート調査を行った。アンケート調査は14項目からなり、日本語学習動機づけの項目のほかに、現在実行している内蒙古大学日本語学科の教学計画及び教授法に関する項目も含まれている。データを分析した上、基礎日本語教育のうち、文法、語彙、表記、作文、日本文化の各科目の教授法及びその問題点について検討を行い、日本語学習動機と学習効果との関係を考察しながら、より効果的な基礎日本語教授法を追究し、就

職先の基本素質の養成と留学先の大学における日本語教育と円滑に接続する可能な日本語教育の教授法を探りたい。

3. 1 学習動機づけ

郭俊海・全京姫(2006)の動機づけの分類を参考として、内蒙古大学の日本語学科の学生の動機づけに関する分析は表1の通りである。

表1. 内蒙古大学日本語学科の54名の学生を対象とする日本語学習動機づけ

	カテゴリー	因子	項目	選択人数 (複数選択あり)	比率
明確な学習動機	統合的動機づけ	日本留学	日本語には漢字が混じっているから、便利だ	9	46.29%
			日本伝統文化が好きだ	4	
			日本語ができる親友の影響を受けた	5	
			将来、日本に留学したい	7	
	大衆文化	日本のアニメが好きだ	14	48.15%	
		日本のテレビドラマや音楽が大好きだ	12		
	日本理解	日本人の性格と行動様式が好きだ	7	12.96%	
	道具的動機づけ	仕事	日本企業に就職したい	13	24.07%
	エリート主義	自己尊重	自分自身の教養を高める(例:国内の公務員試験を受けるつもり)	15	27.78%
		語学学習志向	日本文学、歴史に興味を持つ	4	44.44%
本科卒業後、日本語科の修士課程を専攻するつもり			12		
		本科卒業後、日本語科以外の修士課程を専攻するつもり(日本語を外国語として)	8		
不明確な学習動機	衝動的な選択	コーチング・カウンセリングで上の因子内容関与的な動機喚起可能	大学入試のとき、盲目的で一時衝動的に日本語専攻を選んだ	20	53.70%
	受動的な選択		入学当初、自分の第一志望ではなく、志望調整で日本語を勉強させられた	9	

この日本語学習動機づけに関するデータの分析を通して、内蒙古大学日本語学部の学生の日本語学習動機づけには統合的動機づけが高いと認識できる。また、Gardnerらは、統合的志向が強い学習者の方が道具的志向の強い学習者よりも習熟度が高い、という語学教育における動機づけ研究に大きな影響を与えた説もあった。エリート主義の因子としては自己尊重と語学学習志向を選ぶ学習者の数も少なくない。どちらかといえば、学習者は社会環境や現実状況によりプロモーションのルートを早めに決めたのもよくないことではないだろう。道具的動機づけの学習者の数は意外に少

なく、これは日本の不景気の影響ではないかと推察される。ここで指摘しておきたいのは、明確な動機づけに対する動機不確定の選択者の数である。54名のうち、29名の学習者は、衝動的あるいは受動的に日本語専攻を選択している。このような無動機あるいは動機づけが不明確なままに入学し学習者を対象とする教育現場で、通常の学生とは異なる彼らに明確な動機をつけさせようとするのは、最も重要な任務あると言える。これは学内の教育だけでなく、企業・自治体などの人材開発機関も、ともに教育を受ける人達の動機づけには力を入れるべきである。教育の効果を高めるた

めにも、学習者の学習動機を予め調べておくことは有意義だと思案される。調査の結果に応じて、動機づけの方法を変えてみたり、学習動機を変えるようなコーチング・カウンセリングを行ってみたりすることも必要となろう。

3. 2 内蒙古大学日本語学部の教育計画および教授法の問題

今回実施したアンケート調査には以上の学習動機づけの項目のほかに現在実施している内蒙古大学日本語学部の教育計画および教授法に関する項目も含まれている。基礎段階における日本語教育の各科目、すなわち、文法、語彙、表記、作文、日本文化などの教授法、及びその問題点について検討を行い、日本語学習動機と学習効果との相関関係を考慮しながら、より効果的な基礎日本語教授法を追究し、就職先の基本素質の育成と留学先の大学における日本語教育と円滑に接続することが可能な日本語教育の教授法を探求したい。

調査結果から、以下に掲げる問題点が挙げられる。

(1) 内蒙古大学日本語学部の教学大綱に存在する問題点

- 日本語関連の科目の設定が合理的でない。語彙、文法、発音、表記等に特化した授業科目を編成し、「総合日本語」の科目から独立するべきである。
- 現在実施している内蒙古大学教学大綱と大学教務システムによって、必修科目が多すぎるきらいがある。その結果、選択科目数が少なくなり、学生が自由に科目を選択できない状況にある。
- 履修単位が各8単位である「日本文化」と「日本文学」の2科目は、4学期にわたって開設するのは不合理であり、両科目は統合すべきである。

以上の問題点は現在実施している「2008年内蒙古大学日本語学部本科生教学計画綱目」から抽出したものである。現在、語彙、文法、表記、読解などの内容は、すべて「総合日本語」の一科目の授業内容に属している。週に8時間の授業時間ですべての授業内容を完璧にやるのは無理であると判断されるが、教員数、単位数、授業時間数等の制限の中で、最も有効的な教育活動を行っているという現状も考慮する必要がある。今後、基礎段階における日本語学習者に対し、8時間の授業時間以外には課外指導も導入するような補助的な制度も考えられている。日本文学、日本文化等の科

目は大学院を志望する学生にとってかなり重要な受験科目であり、廃止や他科目との統合は困難であるといえるが、3年生になってから、学生の志望動機に基づき、企業就職コース、留学コース、大学院進学コースなどに分けて、教学内容を適当に調整するように努めている。入学当初において日本語の学習動機が明確な学習者に対して、その学習動機に応える専門的な科目を開設することが最も適切であると言えよう。例えば、内蒙古大学の2+2制度、2+3制度を利用して、日本の大学に留学しようとする学生に専門的な日本語学習科目を設定したり、日本の連携大学と共同的な教学計画を開発したり、教員交換などの制度導入などによって、留学先の日本の大学の学習内容、留学に備えるべき基本素養、留学時の注意事項等を事前に学生に理解させ、留学先の日本の大学における日本語教育と円滑に接続することが可能な日本語教育の教授法を探らなければならないと認識している。

(2) テキストと教授法における問題点

- テキストの選定に問題があり、内容が古くて、学習者の興味にそぐわない。(2人)
- 教師中心の一方的な授業活動は学習者の教学活動に参加する意欲を減退させる。(9人)
- 語学学習に役立つ語学環境がないから、習った知識を実際に応用する機会が少なく、学習者の学習意欲を損ねる。(19人)
- 学習者本人の自律的な能力の欠如で、積極的に日本語学習に力を入れていない。(36人)

以上の結果を見ると、現在の日本語学習環境と自分自身の学習意欲に不満を感じる学生がかなりいることが知られる。日本語を学習している学生の学習意欲に影響する要因は多面的であるが、主な要因としては、学習環境の雰囲気、教授者のやり方、学習者の自律性などが考えられよう。語学学習の教室内では、楽しく支持的な雰囲気が醸成され、学習者と教師の間のインターアクションが円滑に行われる、といった良好で整った学習環境においては、学習者の期待に応えられるだろう。したがって、教師側は積極的に教授法を改善し、学生の学習意欲を高め、より効果的な教授方法を確立していかなければならない。

(3) 語学学習態度の問題

「どのように日本語を勉強していますか」と「学習動機と学習効果の関係についてどう考えますか」とい

う質問に対する回答は教育者の注意を喚起すべき回答であると言える。「積極的に日本語を勉強している」を選ぶ者は1人もいなかった。「どちらかといえば積極的に勉強している」を選ぶ人は17人で、「どちらともいえない」と回答する人は23人、「どちらかといえば消極的に勉強している」を選ぶ人の数は12人であった。また、学習動機と学習効果は密接な関係にあり、相互に影響しあっているという理解が大半を占めている。つまり、内蒙古大学日本語学部の学生の学習意欲はかなり低下していると言える。これは前述の「学習者本人の自律的な能力の欠如により、積極的に日本語を学習することはむずかしい」という項目と関連させて考えれば、学生本人には問題が見られると同時に、教育場所の学校の制度、教授者としての教師のやり方にも改善しなければならないところがあるのではなかろうか。学習動機と学習効果の緊密な関係を念頭において、明確な学習動機をもつ学習者に対して明確な授業内容と積極的な指導を行い、学習者の学習意欲の維持・保持或いは強化に力を入れるべきである。学習動機が不明確な学生に対して、学習者の状況により、学習動機の喚起をしなければならない。もちろん、学習者の学習内容と学習段階の変化により、途中で学習動機が変化する学習者も出てくるが、その変化に応じて授業計画を調整し、学習者を自律的、積極的に学習へ向かわせるのが適切である。

4. おわりに

以上、本稿では、内蒙古大学日本語学部の54名の学生を対象としたアンケート調査に基づき、日本語教育のありかたについて、検討・考察を行った。学習者の学習動機づけおよび現在実施している「2008年内蒙古大学日本語学部本科生教学计划綱目」の問題点を分析することで、学習動機と学習効果の関係を明らかにし、より効果的な基礎日本語教授法を追究し、就職先の基本素質の育成と留学先の大学における日本語教育と円滑に接続することが可能な日本語教育の教授法を提唱しようと考えた。今後の課題として語学学習者の学習動機維持および学習動機喚起の具体的な方法について考察していきたい。

Received date 2013年1月11日

参考文献

郭俊海・大北葉子 (2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」(「日本語教

- 育」110, 130-139. 日本語教育学会).
- 倉八順子(1992)「日本語学習者の動機に関する調査—動機と文化的背景の関連」(「日本語教育」77, 129-141. 日本語教育学会).
- 謝子远 (2010)「学生学習動機対合作式学習効果的影響」(「浙江万里学院学报」第23卷 第5期).
- 杉本明子・黒沢学・文野峯子・大島陽子 (1999)「在日留学生の日本語学習動機と日本語習得」(平成11年度第7回日本語教育学会研究集会講演要旨, 「日本語教育」106号, 84).
- 孫波 (2010)「学習動機在外語学習中の重要性」(語文学刊 第1期).
- 高岸雅子 (2000)「留学経験が日本語学習動機におよぼす影響—米国人短期留学生の場合—」(「日本語教育」105号, 101-110. 日本語教育学会).
- 中川まちこ (2002)「第2言語としての日本語習得に関わる動機づけ—成人(留学生・社会人)にみられる動機の諸相」(東京外国語大学大学院修士論文).
- 成田高宏 (1998)「日本語学習動機と成績との関係—タイの大学生の場合」(「世界の日本語教育」8, 1-11. 国際交流基金日本語教育センター).
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩 (1995)「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合」(「日本語教育」86号, 162-172. 日本語教育学会).
- 根本愛子 (2009)「カタールにおける日本語学習者の学習動機と「日本のポップカルチャーに興味がある若者」の興味・関心の比較」(一橋大学言語社会研究科修士論文).
- バルスコワ, アンナ (2006)「ロシア人大学生の日本語学習の動機づけについて」(「新潟大学国際センター紀要」2, 144-151. 新潟大学国際センター).
- 彭晶王婉莹 (2003)「専業学生与非専業学生日語学習動機及学習効果研究」(「清华大学教育研究」第24卷 増1期).
- 森まどか (2006)「モンゴル人学習者の日本語学習動機に関する分析」(「語文と教育」20, 115-105. 鳴門教育大学国語教育学会).
- 李建敏 (2006)「試析影響外語学習効果的因素」(「勝利油田職工大学学报」第20卷 第3期).

Gardner, R. C. and Lambert, W. E. 1959. Motivational variables in second language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*. 13:266-272

Gardner. R. C. and Lambert, W. E. 1972.

Attitudes and Motivation in Second language
learning. Newbury House

Oxford, R. and shearin, J. 1994.

Language learning motivational: expanding the
theoretical framework. The Modern Language
Journal, 78(i)12-28

Scheidecker, D. and Freeman, W. 1999.

Bringing out the best in students: How
Legendary Teachers Motivate Kids: Corwin
Press